Column

敦煌莫高窟の雪

A snowfall in Dunhuang Mogao Grottoes

今回もまた、雪の降る莫高窟を見ることができなかった――

昭和58（1983）年５月、北京・中央美術学院の留学生たちは一台のマイクロバスに揺られ、柳園の駅からの夜道を敦煌に向かっていました。月明かりに照らされた砂漠の道は、左右に小さな丘が陰となって次々に現われ、４時間の道のりのその不思議な光景は、私の記憶に鮮明に残っています。

中国・甘粛省敦煌莫高窟は、昭和55（1980）年に始まるNHKの特集番組「シルクロード」が映し出した美しい壁画や塑像によって、当時の日本人の心を捉えた場所でした。まだ大学生などが自由に中国へ行くことのできなかった時代、先生たちが休みを利用して中国旅行をし、敦煌で買い求めてきたスライドを使った授業でその感動を巧みに話してくださるのを聞き、仏教美術史を志す若者たちは一様に胸を騒がせたものでした。その場所へ、いま自分が向かっている。でも、あの時の車窓に写ったモノクロの色ばかりが目に焼き付いていて、何故か私は、その後莫高窟で見たはずの壁画や塑像のことをほとんど覚えていないのです。

次に敦煌へ行ったのは、同じ年の９月でした。日本画家・平山郁夫教授を団長とする母校東京藝術大学の敦煌調査団が、第２回目の調査を実施するにあたり、ゆるしを得て同行させていただきました。日本画の平山郁夫先生、下田義寛先生、福井爽人先生、建築の茂木計一郎先生、恩師で美術史の水野敬三郎先生、田口榮一先生、浅井和春先生という顔ぶれで莫高窟の壁画と塑像の研究をしようという調査です。誰もが莫高窟の壁画に憧れ、その前に立つことに感動し、それぞれの口でその感慨を語っている。ある時、全員が手持ちの蛍光管電灯をかざして第220窟の薬師浄土図を照らし出したので、私ははじめて壁画を全壁面として見るという体験をしました。この大壁面を見ながら、「自分ならこの壁の左上の端から描く」と言われた平山先生の声が、いまも耳に残ります。

このように、私と敦煌莫高窟の関わりは、自身にとっての二つの母校である美術学校の学生として訪れた昭和58（1983）年に始まりました。ただ、私自身の専門は仏教彫刻で、すでに河南省洛陽龍門石窟を研究対象としていましたから、しばらくは訪れる機会はなく、次にこの地に来たのは平成４（1992）年の秋、東京国立文化財研究所美術部の研究員となってからでした。これは東文研と敦煌研究院が平成２（1990）年の暮れに調印した合意書に基づき翌年から開始された日中共同研究（第一期）の作業実施のための出張でした。壁画保護を目的とする共同研究は、環境計測や壁画の構造・材質調査を主要なテーマとしていて、中国留学の経験のある美術史研究者はその手伝いで、私は一人の通訳として参加しました。敦煌は雨が降っていました。灰色の空。雨に濡れた敦煌研究院の軒下の電気線に一羽の山鳩がとまっていました。

平成13（2001）年、私は東文研の文化財国際協力センターに配置換えとなりました。ここから始まる10年間、私は中国関係の保護支援プロジェクトのマネージャーとして、多いときにはユネスコの龍門石窟保存修復事業を含む４つのプロジェクトを同時に抱え、忙しく働きました。そして平成18（2006）年、巡りめぐって第五期となった敦煌壁画の保護に関する日中共同研究の担当者となりました。

第五期は、それまでの４期で行なってきた壁画の保護のための修復材料と技術に関する研究に一段落がつき、あらためて壁画の構造そのもの、すなわち使われている顔料やその彩色技法について研究することになりました。敦煌研究院は研究対象として莫高窟でも特に美しい壁画で名高い第285窟を提供してくれました。それは、実際には文化財科学に関するあらゆる領域の研究を網羅したもので、結局平成22（2010）年までの計10年という長い時間をかけ、壁画の状態調査・光学撮影と肉眼による画像観察・科学分析調査・彩色技法研究・環境調査と壁画劣化メカニズムに関する研究・データーベース構築、それを美術史的観点から統括するというほぼ全面的な調査を実現したのです。

平成18（2006）年の開始当時、敦煌側の世代交代が進み、日本側もそれまでの東文研の古い顔ぶれを一新して東京藝術大学の卒業生や東京学芸大学の学生を主力としましたので、双方が若い人材を揃え

た活気ある調査現場が実現しました。大げさに言えば、日中の新しい時代が到来したと言うような光景でした。しかし、研究所の外の人材を活用した反面、東文研内部にこれを大きく発展させる体制を作ることができませんでした。結局、平成27（2015）年度をもって敦煌研究院との共同研究は、準備期間を入れればおよそ30年間に及ぶ歴史に幕を閉じることになりました。

はじめはそれほど縁がなかった敦煌莫高窟に、もう何十回も来たことになります。明るい雨上がりの昼間、敦煌の町に虹が架かったことがあります。初夏に雨が多かった年は駱駝草がたくさん生えて、砂漠に緑が目につきます。やがて、木々が色づき秋を迎えます。綿花が白い綿を付けます。厳冬の莫高窟は、すべての木々が葉を落として白い木肌だけになり、夏にはほとんど干上がっている大泉河に水が出て一面にこおり、真っ白に拡がります。空の青、鳴沙山の褐色。観光客もまばらで、何一つ音の無い世界があります。

その私がまだ見たことのないのが、雪の降る莫高窟の景色です。今回、平成21（2009）年以来使っていた日中共同研究室を片付けるため、最後の出張として敦煌に来ました。出発の前日、雪が降っているという知らせが、研究院の数人から携帯のチャットで届きました。白い木々の枝に降り積もる雪の美しさ。しかし、私が敦煌に着いたときすでに雪は止み、敦煌の市内で降っている日も莫高窟は晴れていました。

今日、最後に第285窟を見ました。10年間存分にやらせてもらった、という感謝と、やり残したことの多さへの悔いがあります。しかし、共同研究は終わったものの、そのいくつかはこれからまだ私はやれると思っています。文化財研究に終わりはありません。

莫高窟の雪は、まだ先の楽しみとすることになりました。

平成29（2017）年１月14日、敦煌研究院にて

（保存科学研究センター　岡田　健）

Digest

The Tokyo National Research Institute for Cultural Properties has conducted the cooperation research project for conservation of the Dunhuang mural paintings with the Dunhuang Academy in China for 25 years since 1990. At the end of the project, I visited Dunhuang as the last responsible person on the Japanese side. During my stay there, I recalled my involvement with the Dunhuang Mogao Grottoes. Over a long period of time, people have deeply understood the immense value of the Dunhuang mural paintings. And it is true that our Institute has significantly contributed to the huge effort that the Dunhuang Academy has devoted to the protection of these mural paintings. Regrettably, however, we have to finish the project, leaving many tasks still undone. There are no goals for researchers of cultural properties. We have such a long way to go. As an expert in the conservation of cultural heritage, I regard it as a matter of pride to always keep such a premise in mind.

(Ken OKADA, Center for Conservation Science)

積雪の莫高窟
A snow scene of the Dunhuang Mogao Grottoes